

## 男らしさ、女らしさから自分らしく

男女共同参画社会の実現に向けて、大分市でも様々な取り組みを行っています。が、まだまだ言葉の認知もおぼつかないといった指摘もあります。

そこで今回は、市民の生活から見た「男らしさ」「女らしさ」「自分らしさ」について4人の方に、お話しいただきました。

## 現在の生活は？

**司会** まず、自己紹介をお願いします。

**重松** 重松勝也、37歳です。妻とは共働きで子どもが3人、一番下の子どもは現在4カ月で妻が産休をとっています。

**姫野** 姫野法子、49歳です。夫と3人の子ども、そして夫の両親と同居している主婦です。92歳になる自分の母親が、姉とともに近所に住んでいるので、協力して世話をしています。

**足立** 足立文子、65歳です。市議会議員を14年務めていましたが、現在生産活動には従事して

いません。



重松勝也さん

ません。今、わが家は全くの男女共生の社会で、互いに支え合って生活する良い関係を築いています。

**井元** 井元誠司郎、65歳です。地元放送局を退職後、現在は家庭裁判所の調停委員を務めています。

## 男の仕事、女の仕事

**井元** 私は今まで男女共生活を送ってきたのですが、調停委員となつて離婚問題や親権のことなどを扱っていると、特に女性の人権について考えさせられるようになりまし。男女平等の世の中になつたといはいえ、まだまだ家庭内では男性優位のようなD.V.(家庭内暴力)

の問題は深刻で、警察は民事不介入といつて助けてくれない、駆け込むシェルターもほとんどないから行き場がなく、夫の暴力から逃れられない。暴力といつても殴る蹴るといった身体的暴力はもちろんです。日常的な暴力としては心的なダメージを与えることの方が多いのです。例えば「誰のお陰でメシが食える」と思っているんだ」とか。

**司会**

無視をしたり、そんな言葉を投げかけることも暴力になるんですね。これはやはり、まず身の回りで起きている様々な事象を、改めて問題として認識する必要があるようですね。

**姫野**

私は3人の老人の世話をしている今の生活の中でつくづく思うのですが、社会の構造は「嫁は「女は」という役割を定着させているようです。例えば介護は男にはできないという風潮がある。これまでずっと子どもの世話をしていた、それがやつ

と終わったと思えば今度は親の世話。しかもそれが当たり前だと、男性は思っているのです。

**井元** そういう所は確かにありますね。だから妻が病気で倒れたりするとあわててしまつて、何も知らないことに初めて気づき、目が覚めるのです。

**姫野** 今は男の料理教室なども行われているようですし、そういう事をもっとやっていたらいいですね。固定観念をとっばらって欲しいですね。できればやはり行政の方から積極的に取り組んでいただければと思います。民間レベルではなかなか浸透しない気がして…。



姫野法子さん

**足立** もうそういう時期がきているんですね。男性だって女性だって自

## 当たり前を突き崩せ

**姫野** 女の仕事だと思つて

いるから労いの言葉ひとつない。現在物理的な手伝いが無理なら、せめて優しい言葉をかけてもらおうとそれだけで支えになるものです。

**重松**

私はまだまだ介護の問題は身近に感じているのですが、自分の生活を振り返ると、現実問題として家事も育児も分担しなければやっつけられない。毎日同じ作業の繰り返しの中で、次の日をいかに充実させるかで一杯な中、でも、コミュニケーション



ヨンは大切ですね。子どもを含め、思いやりの言葉を掛け合う必要性を感じています。

**井元** やはり今の若い人達は違いますね。見ていたら、これからの人達のこととはあまり心配しなくても良いような気がして希望が持てます。

**足立** 重松さんは家事の分担を得意分野で分けているそうですね。困った時は臨機応変にするでしょうけど。

**重松** そうです。料理は妻の方が手早いし美味しいうから、主に妻がするといったように。どうやったら効率的にできるかを常に考え、少しでも次の日のために休んでおこうと考えているわけです。まあ、自分ではやれるだけのことはやっているつもりですが、この場に妻がいたら何て言うかな。(笑)

**司会** それでもまだまだ、男の人に家事などさせては悪いという気持ちの方が女性の方にもありませんか。

**姫野** そういう所もあると思います。今までの育った環境がそうですから、切り換えが難しいですね。社会の通念を変えていくような教育が必要だと思えます。

でも明治・大正生まれの人間にはなかなか伝わりにくいのでは。



足立文子さん

**足立** 男性には根気強く教えないと駄目ですね。今は小学校4年生で男子も女子も家庭科があります。習うと必ずやりますが、習うと必ず時期を逃さないで、子どもにどんどんさせることが重要ですね。「お母さんがした方が早いからいい」なんて言わないで。

**井元** 周りがそういう風潮になれば、男も何かしなきゃならんという気になりますね。(笑)

**重松** そういう意味でもやはり教育は大事だし、メディアの果たす役割も同じくらい重要だと思います。先日テレビを見ていた子どもが「女の人がバイクに乗ってもいいの？」と尋ねてきたり、「女の人がタバコ吸ってもいいの？」なんて言うんで驚いたことがあります。

が教えてもらえないのどこで覚えてくるんだらうと。テレビを通じて知らない間に吸収しているんですね。その影響力の大きさに一種の恐ろしさ感じます。

### 自分にできることから

**司会** 皆さんの生活をこの短い間に話していただいているだけでも、随分とたくさん問題が出てくるのが分かりました。最後に、そのような今の生活の中で自分なりに実践していることと思うことがあったらお話し下さい。

**重松** 今の生活をより快適に過ごそうという観点で、これからも妻と話し合っていくながら暮らししていきたいと思えます。

**足立** 高齢者の生きがい対策というのがあって、様々な交流活動をしているところですね。お年寄りにもいろいろ勉強していただいています。



井元誠司郎さん

女性部なんてつくらないで男も女も一緒にやっていたり、会長も男がする風潮を廃止して、皆の持ち回りにしたりしていきます。皆さんイキイキしていますよ。これからはこういう活動を続けていこうと思っています。

### 自分

**姫野** 明治・大正の人にはいろいろ働きかけるのは半分あきらめてしまいましたが、それではいけない、変えていかなければならぬんだと考えさせられました。



司会者

**井元** 男女共同参画社会基本法ができたことは良いことだが、もっと分かりやすい形での啓発が必要ではないでしょうか。

**足立** 関心の高い人はいます。でももっと広がらないといけませんね。「100人の1歩」という言葉に学ばなければなりませんね。

**司会** その役割を果たしていただけるよう、本誌も、

がんばっていきましょう。ありがとうございます。

## ジェンダーって?

生物学的性差をセックスというのに対して、社会的・文化的に人々の意識の中でつくられた性差のこと。

### 「家庭科」の

### 男女共修の変革

**戦前** 「家制度」の下で、女性の役割として、国家振興や国力強化に貢献する国民を「育てる」ことに限定。

**戦後** 「裁縫科・家事科」

**1957年** 小学校5・6年のみ、男女共修。中学校「職業・家庭科」。高校は選択教科としてスタート。

**1973年** 中学校「技術・家庭科」で男子向き、女子向き

**1993年** 高校「家庭一般」が女子の必修、男子は体育

**1994年** 中学校で男女必修  
高校で男女必修

